

型のものしか採集できなかった。そのため葉上動物中重要な位置を占めているヨコエビ類は、どの漁獲魚の胃内容物からも検出することはできなかった。別の方法で小型魚類の食性を調べる必要があろう。

4. 底生動物調査

〔方法〕

図-1に示したst 7付近のアジモ場最繁茂部と、モ場の沖側約100mの砂質底で底生動物の採集を行なった。採集は、1mm目の標準ふるい(直径20cm)を逆さにして、(海草の生育している場合はその上からかぶせる)ふるいの底が海底表面近くに達するまで押し込み、スコップでそのまますくい取るようにして行なった。その後1mm目のふるいを通し、残ったものについて分類した。調査は、79年7月、9月、11月、80年1月の4回実施した。各月の採集は3回づつ行ない、それらを合わせて底面1㎡当りの個体数と重量を算出した。

〔結果と考察〕

表-7に採集結果を示した。アジモ場、砂質底ともに1回のサンプリングによるばらつきが大きく、季節的な変化については明らか結果が出なかった。

アジモ場では、全調査月ともに多毛類・貧毛類・端脚類が個体数の上で優占的であるが、それらは1個体当りの重量が軽いので、現存量においてはそれ程大きな値を示さない。逆に斧足類は生息密度が小さいが、1個体当りの重量が重いので現存量としては、非常に大きな値を示している。

砂質底は、サンゴ由来の粒度の大きな砂で構成されており、時にサンゴれきが混存している。ここでは、多毛類がやや多い程度で他は少ない。80年1月の値は、他と比べて多毛類・貧毛類・タナイス類の個体数がかなり多くなっているが、この時は採集物中にサンゴれきが多く入っていた。

アジモ場とアジモ場沖の砂質底の底生動物を比較すると、一般的に生息密度・現存量ともにアジモ場は優れていることがわかる。これは、海草が生育することによりモ場独特の葉上動物群集が添加したということに停まらず、両地点の底質の相違にも起因していると思われる。(貧毛類・斧足類などの砂質底での減少)。